

帝都物語

神靈篇

荒俣宏



てい と もの がたり
帝都物語 1

あらた ひろし
荒俣 宏



角川文庫 688o

昭和六十二年九月二十五日 初版発行
昭和六十二年十一月十五日 五版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見一十三—三

電話 編集部〇三—二三八—八四五—

営業部〇三—二三八—八五二—

〒一〇一 振替東京③一九五二〇八

印刷所 暁印刷 製本所 本間製本

装幀者 杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

江苏工业学院图书馆

帝都物語

神靈篇
原保宏
藏 書 章



角川文庫 688o

東京を愛し、

東京を憎む、

すべての人々に――

目次

プロローグ

卷一 神降ろしかみおろしの一夜

卷二 よみがえる信淵のぶひろ

卷三 魅入みいられた処女おとめ

卷四 東京改造計画

卷五 途方とほうもない提案ていあん

卷六 式神しきがみを駆かる者ども

魔術解説

荒俣

宏

三〇

一七〇

一八六

二二

六九

四四

三三

九

〈登場人物〉

平将門たいしょうもん

平安期関東最大の英雄。中央政

権に刃向かい、関東を独立国化したため討伐されたが、その一生は関東ユートピア設立のためにささげられた。現在もなお大手町のビルの一角に残る将門首塚は、すでに千年間、東京の中心を鎮護しつづけている。

佐藤信淵さとうのぶひろ

江戸末期の経世家、鉾山技術家、

兵法家。ユートピアをめざし、将門ゆかりの印旛沼をはじめ内洋すべてを干拓し生産性の向上をもとめた人物。彼の『宇内混同秘策』は神道家平田篤胤等の奇怪な日本中心主義を借りて、全世界を征服するための青写真を描いた一大奇書であり、この中に「東京」とい

う名称が初めて用いられたとされる。

寺田寅彦てらだ とらひこ

日本を代表する超博物学者、夏

目漱石の一番弟子。江戸末期にふとした事件から実弟を手にかけて死なせた父のやるせない思いを無意識に受けつぐ一方、物理学者でありながら超自然や怪異への限りない興味をいだきつづけた。迫りくる東京滅亡を必死で喰いとめようとする少壮の学士。

渋沢栄一しぶさわ えいいち

明治期東京を代表する実業家で、

自由競争経済建設の指導者。パリ万博にもむいた幕府使節団の一人で、第一国立銀行の頭取をつとめるなど金融体制の設立にも力があつた。儒教倫理の持ち主らしく、怪異・神秘に対しては「怪力乱神を語らず」の姿勢を通した。

織田完之おだ ひろゆき

三河国の豪農の家に生まれ勤王

派に加わり、桂小五郎や高杉晋作らと交友し

たが、維新後は明治政府の農業・干拓事業を担当、とりわけ印旛沼の治水事業には力を入れた。二十五年に引退し碑文協会を設立、以来、二宮尊徳・佐藤信淵の思想の体系的紹介に尽力した。

幸田露伴 本名は幸田成行。明治期最大の東洋神秘学研究家の一人。その著『魔法修行者』『頭脳論』などの奇作と並び、因縁めいた評伝『平将門』などは、『帝都物語』の読者には必携必読であろう。『八犬伝』の熱烈な支持者でもあった。また彼には『一国の首都』と題した長大な東京改造論があり、後年には寺田寅彦と親交を結び、渋沢栄一の伝記をも著している。

カール・ハウスホーファー ミュンヘンに生まれ、一八八七年陸軍の将官として印度、東アジア、シベリアを旅行し、一九〇九年か

ら約二年日本にも滞在した。日本においては「緑竜」なる結社に入会したとされる。地政学（ゲオポリティク）を戦争の科学に高め、初期ナチズムの神秘的な教養を形成する影の参謀となった。また後年ミュンヘン大学の教授・学長を歴任、敗戦ののち割腹自殺を遂げた。

森田正馬 日本近代の精神医学者、治療家。寺田寅彦が幼少期を過した高知に生まれ、犬神憑きなどの霊現象を研究した。のち、「森田療法」として知られる独創的な精神病治療法を確立した。

森林太郎 筆名は鷗外。明治期最大の文学者の一人で、軍医としても多くの業績を残した。高級官吏と文学者の二道をとともに追究し、そして傷ついた。幸田露伴とは親友のあいだがらで、斎藤緑雨を加えて《三人冗語》の名

による洒落た文芸時評を合作した。

大河内正敏

江戸期以来の名門大河内家の英才。東京帝国大学では寺田寅彦以上の天才

とうたわれ、共同で物理学の実験も手がけた。大正六年に設立された応用科学研究所の総本山

「理化学研究所」(略称は「理研」)の総裁となる。美丈夫のはまれ高く、人柄も名家の出にふさわしく寛大だった。

安倍晴明 平安期の大陰陽師、天文博士。当時の霊的コンサルタントとして皇族や貴族・民衆のあいだに絶大な信望を集めた。一説に、信太の狐の子といわれ、官制魔道の宗家「土御門」の開祖となった。日本最大の

白魔術師。

辰宮洋一郎 大蔵省の若き官吏。帝都改造計画に加わり、明治末期から大正にかけての歴史の奔流を目撃する。

辰宮洋一郎

大蔵省の若き官吏。帝都改造計画に加わり、明治末期から大正にかけての歴史の奔流を目撃する。

歴史の奔流を目撃する。

辰宮由佳理

洋一郎の妹。強度のヒステリ

ー症状ないしは一種の霊能を有し、そのため

に奇怪な事件に巻き込まれる。精神を病んで

森田正馬医師の治療をうけるが、帝都に撒かれた怨念と復讐の種子は、彼女を通じて不気味に開花する。

鳴滝純一 理学士。辰宮洋一郎の旧友で、東京帝国大学理科大学に籍を置く。怪事に巻き込まれた辰宮由佳理を必死に救出するが、

凶刃に倒れる。

平井保昌 土御門家の老陰陽師。秘術を尽くして宿敵とわたりあうが、明治天皇崩御に

接し自刃。鬼殺しの英雄源頼光に仕えた武者に同名の人物がおり、奇しくも明治版「羅生門の鬼」事件に遭遇する。

洪鳳 朝鮮の秘密結社「天道教」に所属する女。

林覚 支那の秘密結社「三合会」に所属する青年。

加藤保憲 陸軍少尉。のち中尉。帝都に怨霊を喚び、古来最も恐れられた呪殺の秘法「壘術」を使う。陰陽道、奇門遁甲に通じ、目に見えぬ鬼神「式神」をあやつる。辰宮由佳理を誘拐した真の目的は何か。帝都の命運はこの怪人物の掌中に握られている。

プロローグ

鬼が来る

浅草あさくさの興行街のなかで、いつも人だかりが絶えない小屋といえ、
「お化け屋敷」にきまっ
ている。

ろくろ首、かまいたち、人魚、そしてヘビ女。

それから浅草名物十二階。この巨大な塔きょだいとうにのぼると、明治の帝都が一望できる。文明開化の
勝利品は、この十二階につくられた「えれべえたあ」。なにしろ機械の力で屋上までのぼって
いける。

しかし今日きょうだけは、浅草の人気をひとり占めする出しものが幕をあけた。題して、『羅生門らしょうもん
の鬼退治おにたいじ』！

十二階の下にたむろする、よからぬ商売の女たちも、その女たちを更生こうせいさせようと、楽隊らくたいす
がたでブンチャカ乗りこんできた救世軍きゅうせいぐんも、半日のおひまをもらった女中じょちゆうも丁稚ていぢも、大店の番

頭さんも、みんながみんな、その覗きカラクリ小屋に集まった。

さっそく木戸番の前にしゃしゃりでた口上屋が、甲高い声をはりあげて人をさそう。小屋の奥から、チャカポコ、チャカポコという景氣よい鉦の伴奏が鳴りひびく――。

さあ、いらっしやい、いらっしやい、明治の御世は文明開化、カラクリ眼鏡も大じかけだよ。

さあさ、いらっしやい、いらっしやい、ここもとお目にかかります出しものは、あの恐ろしい羅生門の鬼だよ、お立合い！ 鬼だ、鬼だ、鬼が来た。

ごらんなさいよ、カラクリ眼鏡のその奥に、切られた鬼の片腕が見える。しかもその腕が、こうして空をつかまえばかりに爪たてて、動きもだえるというのだから驚きだよ！

さあ、いらっしやい、教育は参考資料、孫の代までの語り草、生きた鬼の腕なんざ、もう二度と見られないよ、お立合い。

だが、驚くのはまだ早い、奥の舞台にやへび女も登場いたします。かわいそうなのはこの子でござい。この子の生まれは北海道。とかちの国は石狩川の上流に生まれまして、ある日のこと、お父さん歟にてマムシの胴体まっぶたつ。マムシの執念その子にむくい、できた子供がこの子でござい！

当年とって十八歳、手足がなく、胴体で巻きつくという。名前は花子。ハナちゃんやーい。大人が十銭、小人が五銭。片目は半額、はらみ女は二倍だよ。

さあ、いらっしやい、いらっしやい。鬼だ、鬼だ、鬼が来る。文明開化の東京に、鬼が来るんだ、鬼が来る。さあ、

今が見どころだよ。鬼だ、鬼だ、鬼が来る。

鬼だよ。

鬼だよ。

鬼とござーい！

東京の市民は、羅生門の鬼にさそわれて、次々に浅草の怪しげな見世物小屋へ吸いこまれていった。鬼も、ろくろっ首も、ヘビ女も、化けものたちはいつだって浅草にたむろしている。だが、この化けものたちは悲しい囚人だった。見世物小屋の外へは、たとえ一歩といえども出ていけない囚人だった。

だから市民は安心して、化けもの見物にうつつを抜かすことができた。ヘビ女や人魚を、ねめつけることができた。けれどその代わり、なんとも手のつけられぬ狂悪なほんものの鬼が一匹、帝都東京を自由に闊歩しはじめたことを知らなかった。

明治四十年、その鬼は、二千年におよんだ鬼の怨みを晴らすために、単身、帝都へ侵入した。

巻一 神降ろしの一夜

1 ドーマンセーマン

明治四十年四月は、桜の季節というのに、幕あけからなにやら肌寒く、上野の山の賑わいもいつになくさびしかった。

夜にはいると、寒さはいちだんと強まり、二十四節氣にいう清明がめぐりきて、文字どおり清く明るい時節になるべきなのに、東京の市はかたく雨戸を閉ざすばかりだった。時刻はすでに午前二時をまわった。

暗く重苦しい夜空の下に、びくりと蠢くものがあつた。大きなモミの木が夜空よりもなお黒くろとそびえるあたり、その下にこんもりと盛り上がった塚が見えた。その斜面を伝う、苔むした石段の上に、見れば一匹の墓がうずくまっている。

まがまがしいこの動物は、しかし、するどい両目を塚の頂上に向けたまま、まるで手足だけ

別の生きもののようにヒクヒクと動かしながら、石段を這いあがっていた。手と足を動かすことに一瞬でも気の集中を殺がれれば、だいたいな獲物を捕りそこなうとでもいうのか、不気味な墓は視線をそらせもせず、塚の頂上へ自動人形のようににじり寄っていく。

「ウッ」と唸る声が、塚の上から聞こえた。

その声を握りつぶすかのように、大きな手が伸びて若い男の口をふさいだ。白手袋だ。口をふさがれた若い男は、首を上げしく捻って上を見あげようとした。

その白眼がギリリと光る。

若者を抱きかかえるようにした白手袋の主は軍人だった。

この男もまだ若い。だが、将校には年齢がない。人間というものは、将校になったとたん、年齢には関係なく「世界」との対峙のしかたを身につける。たった一人で「世界」に挑む力と勇気とを、彼等は将校の肩書きを得た瞬間から、自分のものにする。

しかし、この若い軍人に引きかえて、白手袋で口を押えられたもう一人の若者のほうは、ただ見苦しく藻掻きつづけるばかりだった。まるで闇の中に置き去られた幼児のように。

軍人は、燃えるような目で墓を睨みつづけた。この小さな怪物から視線をそらせたが最後、生命を失う結果になることを、彼も熟知しているようだった。だから、あきらかに文官とおぼしいもう一人の口を押えつけ、体を包み込むようにして、彼の自由を奪いつづけた。

けれども、若い文官はそんな事情を察する余裕がなかった。やにわに、鋼鉄のような軍人の

腕に抱かれ、息を奪われたのだ。反射的に身もだえし、処女のように恐れおののくしかなかった。彼の鼻づらを、軍人のふしぎな体臭が包みこんだ。

その匂いがほんの一瞬、若い文官をうつとりさせた。目がうるみ、てのひらで塞がれた口もそこから緊張が消えた。

だが、とつじよ、うるんだ目に不気味なものが映しだされた。石段の中央に這いつくばる、黒くてみにくい墓のすがた――

墓はさらに登ってくる。ねらう獲物に隙が見えたその瞬間、長い舌を噴きだして、頂上の二人をその大口に吸いこもうというのか。

精悍な軍人の額に、脂汗がにじんだ。息を継ぐこともできなかった。抱きかかえられた若者が、首をねじ曲げて悶える。

「声を出すな！」

ささやき声が、しかし有無を言わさない気迫と威嚇に満ちた声が、男の耳許にひびいた。

沈黙――

ややあって、軍人はようやく手をゆるめると、視線で墓を射すくめたまま、ゆっくりと白手袋を外しはじめた。墓に気づかれぬくらいに、ゆっくり、ゆっくりと。

白手袋が、闇のなかに浮かぶようにして軍人の手から脱げた。甲のあたりに、なにやら黒い染め紋様が見えた。

家紋か？

家紋にしては奇怪だった。それは五芒星のかたちをしていた。

瞬間、石段を登りつめた小さな怪物が、身をひるがえして頂上に跳びあがった。しかし怪物は、二人の面前にうずくまったとき、せいっぱい跳んできたための反動をくらって、その目をわずかに外した。ちょうど、まばたきでもするようだった。

そのときだった。軍人はふいに片手をひるがえし、恐ろしい気合もろとも白手袋を投げつけた。墓はそれに打たれ、ギャツと悲鳴を発し白い腹を仰向けた。長い脚に痙攣が走って、やがて動きをとめた。

とたんに、死ぬほどの緊縛がとけた。

「何です、あれは？ あのカマは！」

「魔物だ。われわれに向けて式神を打った者がいる！」

震えおののく若者の声を制するように、軍人は鋭い言葉で答えた。

「式神ですって？ どういう意味ですか？」

「説明している暇はない。危険な使い魔のことだ」

「犬神とかオサキギツネのような？ つまりわたしたちに呪詛をかけた者がいるのですね？」

「心配するな。式神を打ち返して魔物は仕止めた」